The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人との出合い、問いとの出合い
Author(s)	服部, 佐和子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2012, 18, p. 18-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23008
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人との出合い、問いとの出合い

服部佐和子

1．対話の場の選択

2010 年、箕面市国際交流協会との共催で「在住外国人との語り合いカフェ」が 4 回に渡って開かれた。そのうち 3 回目（10 月 15 日）と 4 回目（11 月 5 日）は哲学カフェのような対話の場――この時は敢えて「哲学カフェ」ではなく「語り合いカフェ」という表現が用いられた――であった。3, 4 回目の語り合いは盛況で「哲学カフェ」として見ればそれぞれ興味深いものであったと思う。ただ、この語り合いは「在住外国人との」という目的のもとに設けられたものであると同時に、その当事者とその他の人々――もちろん誰が真に「当事者」であるのかは大いに議論の余地があると思われるが、今回は暫定的にこのような表現を用いることをお許し頂きたい――が入り混じる場であった。

対話の場が最初から意図をもって設定されていたためであろうか、少なくとも私は違和感を覚えたことを記憶している。『臨床哲学のメチエ vol.17』（pp.5-8）の中で、金和永さんが対話において感じられた「もどかしさ」について書かれているが、この時の私はその対話の場への期待と実際の進行具合の間――あるいは当事者と聞き手との間――の中間地点に身を置くもどかしさに耐え得る十分な用意が無かったのかも知れない。

当事者はテーマの提案者としてその場で自らを他に開いて話すことを求められるであろうし、その用意もあるであろう。しかし哲学カフェの自由に意見を交えるという形式においては、当事者であろうと何であろうと結局のところその場の一参加者に還元されてしまい――もちろん、これは哲学カフェの魅力の一つでもあろうが――、当然のことながら関心事について集中的に話し合うということは困難であった。たとえ当事者の意見が取り上げられたとしても、掘り下げる前に話題が変わるとき、或いは発言の流れが「問題の解決」へ傾くとき、このような場合もやはり――確かに重要な手続きではあるが――問題の奥深いところには迫ることができなかった。

また、当事者は具体的な体験をある程度一般化して「皆にも分かるように」提示することが求められることになるが、問題共有のための糸口を未だ発見できない聞き手（受け手）側は、実際の問題の背景などが見えないまま当事者に面し、分からないままに意見を述べることの居心地の悪さを感じざるを得ない 。そして言うまでも無く、その命題が自らと密接に関係していることを意識しつつ、単に自己主張するのではなく、他者の声を容れようと敢えて人前に提示することは、当事者にとっては相当なエネルギーを要するものであろう。ここで、たとえ当事者の発言を掬い上げて、その確認作業に入ったとしても、話が噛み合わない場では、それは自らを開いて語ろうとする者の声を制限するものにも容易になり得るだろう。そのようなわけで、私は対話後

に「色んな意見が出て興味深かった」などと楽観的には感想を述べられず、ただ「聴かなければ」と思ったものである。

対話の場の安全性、ということが言われる。上の哲学カフェの形式を用いた対話は、問いと当事者、またその扱い方について大いに考えさせられる経験であった。ただ対話の場を設ければ良い、というだけではなく、その対話の目的や問題の状態、そして人を見極めて場の形式を選択すること（あるいは対話を重ねる中で形式を変えていくこと）の必要性、その場への責任を改めて感じさせられた瞬間である。

2．人を通じて

それでは、とにかく当事者に耳を傾けて学ぼうではないか。そしてより話しやすい場に変えて、じっくり話してみようではないか。2011 年から 2012 年にかけて開かれた「語り合いカフェ」では、少人数のグループを作り、外国にルーツを持つゲストを囲み、そのメンバー全員でテーマを決めて自由に話し合う、という形がとられた。この形式では、メンバーの日常的な何気ないお喋りも含め、普段から抱いている疑問や意見を述べたり、それらに応答したりと、より個別的な関係に配慮し、リラックスした雰囲気の中で進行していった。そうこうするうちに、当然ながら、より人が見えてくる。そして、人が見えてき始めたその時に漸く、当初話し合おうとしていたテーマも少しずつ見えてきたように私は思う。

痛感したのは、外国にルーツを持つそれぞれの方が、日本での生活において、私たち聴き手の想像を超える不安、困難、葛藤などを潜り抜けて来られたのであろう、ということである。お話しして下さった方のお一人が「私が声を上げるのは、そうしないと伝わらないから。そして自分と同じような境遇にある人々のため」と仰っていたのが印象的であった。日本に長年暮らされ、一見すっかりこちらの生活に馴染んでいらっしゃるようであるからこそ、その思いが強く迫ってきた。

しかしながら、これは実際の事後的なものからやや先取りした表現である。今思い返せば、この段階では私自身は聴き手としてこの対話の場には未だ受動的な姿勢で臨んでいたのではないかと思う。2012 年 2 月に箕面市国際交流協会のスタッフと一緒に NSD（ネオ・ソクラティック・ダイアローグ）の場を囲む機会に恵まれたのだが、命題をメンバー個人の具体的経験から考察する NSD の過程における傾聴と応答、発言という一連の作業によって、対話において能動、受動の二つの姿勢をとることとなり、関わっている問題に対する自らの姿勢の変化を感じ取るという経験をさせて頂いた。このことに関して、NSD という枠内において、あるテーマを巡って参加者の経験を具体例として提出し合い、また一つ一つの言葉の概念も綿密に確認して行くことで、ある出来事や言葉を媒介として参加者の経験が交差する、ということが一つ考えられるのではないかと思う。それは、意見の共有、メンバー全員の理解の後にのみ議論が進められるというルールのもとにあって、より鮮明に感ぜられたのかも知れない。

テーマや命題が先にあり、それについて考える時、そのテーマの範疇の関係者に私たちは積極的に出会うようになる。しかし、私たち自身が問いそのものに出合うことは予想以上に複雑ではないだろうか。問いはそれだけを見ていたのでは何も生じず、しかし、なかなか一筋縄にはいかない個別的な人との出会いを通じて思いがけない仕方で現れる。既定のテーマをひとまず措いて、個々人との出会いを通じ、テーマに改めて出合い直すという経験が、実際に生きた人と、生きた対話の場を作るために重要になってくるのではないかと思われたのである。

それにしても、ここまで書いてきて気付けば、私は対話を巡る抽象的な命題と個別的な出合いとについて語るつもりが、自らの表現自体が極めて抽象的になってしまい、ある種の自己矛盾を感じ反省している次第である。そのことをお詫びすると同時に、何よりも、このような気付きと今後の課題、その契機を与えて下さった臨床哲学、「対話コンポ班」のメンバー、箕面市国際交流協会の皆さまに心より感謝申し上げる。

（はっとり　さわこ）